慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	誰が話しているのか? : エミール・バンヴェニストの言語思想における異質な「話し手」の相貌
Sub Title	Who is speaking? : unfamiliar aspects of "speaker" in Émile Benveniste's linguistic thoughts
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.54 (2023. 3) ,p.1- 25
JaLC DOI	10.14991/005.00000054-0001
Abstract	本稿は、エミール・バンヴェニスト（1902-1976）の言語思想に現れる、「話す」という行為を担う者の概念を再検討する試みである。一般言語学と比較文法に跨がる彼の書き物を精読するなかで現れる幾つかの思考と用語–非個人的な語りの《ºbha-》、「言語内部に宿る主体性」「患者」「言語の促し」「（引用する）語り手」–等を各セクションごとに拾い出していくが、そうした思考は周縁的であったり隠蔽されていたり、さらにはバンヴェニストによって否定されているものである。こうした裏側の思考を作り出す源泉の一つとなったのは、精神分析医ジャック・ラカンとの出会いが大きいと私たちは考える。従って本稿ではラカン派精神分析の影響についても指摘していく。 sujet /sy-zeスュジェ/ ① 主題、テーマ、題目、論題 ② 【文法】主語 ③ 原因、理由、種 ④ （ある性質の）人 ⑤ 実験動物、被験者、患者；（解剖用）死体 ⑥ 【哲学】主体（⇔objet客体）；主観 ⑦ 【言語】sujet parlant 話者、話し手；（母語の）話し手 – プチ・ロワイヤル仏和辞典より
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守し

てご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

誰が話しているのか？
――エミール・バンヴェニストの言語思想における異質な「話し手」の相貌

小　野　　文

要旨

本稿は、エミール・バンヴェニスト（1902-1976）の言語思想に現れる、「話す」という行為を担う者の概念を再検討する試みである。一般言語学と比較文法に跨がる彼の書き物を精読するなかで現れる幾つかの思考と用語――非個人的な語りの《ºbha-》、「言語内部に宿る主体性」「患者」「言語の促し」「（引用する）語り手」――等を各セクションごとに拾い出していくが、そうした思考は周縁的であったり隠蔽されていたり、さらにはバンヴェニストによって否定されているものである。こうした裏側の思考を作り出す源泉の一つとなったのは、精神分析医ジャック・ラカンとの出会いが大きいと私たちは考える。従って本稿ではラカン派精神分析の影響についても指摘していく。

sujet /sy-zeスュジェ /
① 主題、テーマ、題目、論題
②【文法】主語
③ 原因、理由、種
④（ある性質の）人
⑤ 実験動物、被験者、患者；（解剖用）死体
⑥【哲学】主体（⇔objet客体）；主観
⑦【言語】sujet parlant 話者、話し手；（母語の）話し手
―― *プチ・ロワイヤル仏和辞典より*

0. はじめに

エミール・バンヴェニストの言語学が一般的な言語学の入門書や文学理論のなかで語られるとき、そこで参照されているのは殆どつねに「ディスクー

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 54 号（2023）pp.1-25

ル」「発話行為」といった現働化されたことばに関わる概念であり、また「わたし／あなた」という対話の関係と三人称（バンヴェニストは非=人称と名づける）の対立を焦点化した人称代名詞の理論ではなかろうか。もう少し詳しい叙述になると、バンヴェニストがことばのなかに宿る主体性の標識（指呼詞やアオリストと対立するところの複合過去時制など）を明るみに出し、語用論のみならず物語論にも多大な影響を与えたこと、またオースティンの言語行為論と一見対立する形で、約束や命名といった言語行為における言語学的条件（一人称・遂行動詞・現在形）を打ち出したことなどが取り上げられる。バンヴェニストの代表的な論考といわれる「ことばにおける主体性について」（1958）のタイトルがいみじくも象徴的に示すように、この言語学者がことばにおける「主体性」の顕現を改めて強調し、ことばと主体の複雑な関係の一端を解きほぐそうとしたことが、いずれの場合も語られている。

しかしながら一歩近づいて彼の論考を眺めるとき、この「ことばにおける主体性」という思想の形成については未だ、謎が多く残されていることが分かる。すでに1986年、言語思想史家クローディン・ノルマンは「主体sujet」、「主語sujet」、「動作主agent」、「話者locuteur」、「発話行為主énonciateur」「個人individu」「人（称）personne」「話す人homme parlant」等の用語群がバンヴェニストの言語学のうちに入り乱れていること、それらのほとんどが理論的な定義を受けておらず、用語間の関係性もはっきりしていないことを指摘している[1]。「一人称の主語」を取る「話す主体」が、「あなたという他者」を前にして、話すという行為を担っていくという、一般に膾炙されたバンヴェニスト言語学の定理をなぞるような思想は、彼の書き物のうちには存在しないのである。

「ラング」を対象としていた構造主義言語学から「ディスクール」へと開かれる言語学をバンヴェニストが目指そうとするとき、言い換えれば彼が「話す」という行為を考察対象としていく50-60年代において、「誰が」話す

1　Claudine Normand, « Les termes de l'énonciation de Benveniste », *Histoire Épistémologie Langage*, VIII-2, 1986, pp.191-206.

のか、「誰が」言葉の営為を引き受けていくのか、という問題が曖昧になっている――このことの意味は、立ち止まって考えるべきであろう。「ことばにおける主体性」という問題圏のなかでも有名な定式：「人が主体として自らを構成するのは、ことばにおいて、またことばによってである」においても「人homme」が主語となっているように、「話す」という行為を引き取る主辞は「主体sujet」ではなく、むしろこの用語は巧妙に避けられ、「話す」という行為の最後に、そのプロセスの結果として姿を現す儚い存在として描かれている[2]。発話行為を担う者を指す用語が曖昧であるという、理論としては致命的な欠陥を指摘する声もあるが、一方でバンヴェニストはそれを望んでいたとする見方もある[3]。

この「誰が」発話行為という行為を引き取るのかという問題は、バンヴェニストのうちで明確な定義付けを受けていない代わりに、様々な局面で取り上げられており、そこに現れる「誰か」の姿は、その都度変容していると考えられる。言い換えれば、「誰が」という問題は、見慣れない幾つもの顔をゆっくりと形成していっているようなのである。本稿では、「誰が話しているのか」という問いを導きの糸として、バンヴェニストの「話す」という思想のなかに現れる《sujet》(主語／主体／主辞……）の姿、または言葉を担う者の後を追ってみたい。

1．《ºbhā-》、誰のものでもない語り

バンヴェニストは戦後、避難先のスイスからパリに戻った直後の1944年から1950年にかけて、インド=ヨーロッパ諸言語の制度語彙に関する授業をコレージュ・ド・フランスで行っている。この講義が元となって後に出版されるのが、バンヴェニストの比較言語学の大成といわれる『インド=ヨーロッパ諸制度語彙集』全二巻である。この講義のためにバンヴェニストが準備し

2　これについては複数の場所で指摘しているが、最も最近のものは以下を参照されたい。小野 文「エミール・バンヴェニストの「ことばにおける主体性」――ある一文を巡って」、『日吉紀要 人文科学』37号、2022年、67-98頁。

3　P. Dalhet « Une théorie, un songe : les énonciations de Benveniste », *LINX*, numéro spécial sur Benveniste, 1997, pp.195-209.

たノートもパリ国立図書館草稿部には残されており、大まかな内容は重なるものの、章立ての順番や語り口は別様で、草稿からはバンヴェニストの息遣いが文面から直に伝わってくる。

この準備ノートの一部（『語彙集』では「法」セクションと「宗教」セクションに相当）には、出版されたものにはないタイトルが付けられている。「言葉に関する用語」というのがそれで、サブタイトルとして、「契約の類と宗教的・法的側面をもつ言葉の表現様態」という走り書きが見られる。『語彙集』では明確に言い表されていないものの、この「法」と「宗教」セクションで焦点化されているのは正に「ことばの力」であり、「話す」という行為がもつあらゆる側面を、制度語彙と結びつけてバンヴェニストはさらけ出しているのだと言える。

第三部で現れる「話す」という行為については別稿を立てる必要があろうが、本稿における私たちの関心からここで注目したいのは、バンヴェニストが非人称の発話行為について語っている箇所である。『語彙集』では「法」セクションの第5章《fas》に属することになる考察は、講義ノートでは「第8章《ºbhā-》」と題されており、インド＝ヨーロッパ祖語の《ºbhā-》から始まって、「神の法」を指すラテン語のfasが、なぜ、どのようにして同じくラテン語のfor「話す」と結びつくのかを探究する章となっている。

この章で扱われている発話行為は、現代の私たちが通常考える「話す」行為とその話し手から遠く離れたものである。

> この語根ºbhā-が発話するものは、非常に特殊な言語行為の捉え方である。それは単なる言うこと、何かを発話することでは全くなく、ましてや論証や反省を発する言葉（それはλέγωの場合である）や個人的行為としての言葉（φημίは脇に置くとして）ではない。（fº 298 [146 580] P.O.B. 61, Envelope 257bis）[4]

4　本文中のバンヴェニストの著作の引用に関しては、『一般言語学の諸問題』第1巻、第2巻をそれぞれPLG1、PLG2と、『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』をVOC I、VOC IIと記し、ページ数を記す。また草稿に関しては、草稿番号を“fº”の後に記す。出版物のうち、邦訳が存在する場合は、その頁数を「/」の後に記す。

この言語行為はどのように特殊なのか。《ºbhā-》とそれにまつわる関連語彙の概念を確定するため、最初にバンヴェニストが取り上げるのが《infans》である。

> その点で重要な形態がラテン語に一つある。現在分詞*infans*「年端のいかない子ども、まだ話せない者」がそれで、ウァルロは*fatur*との結びつきをこう説明している（『ラテン語論』）。「ひとりの人間が初めて意味のある言葉を発して話す（*fatur*）。話すという行為をする以前の子どもたちが*infantes*と呼ばれるのは、このためである。しかし話せるようになると、彼らはすでに話している（*iam fari*）と言われる」。
>
> 我々もまた、子どもが「話す」とか「話さない」と言う。こうして分節された言葉なり発話行為なりを、言語活動の表出として、人間的個性の表れとしてみる。［……］子どもが*iam fatur*「話す」とき、人はそこに何を言うかではなく、あらゆる人間に共通する非人称的な能力の発現を、つまり人間が話す能力をもつという事実をみようとするのだ。（VOCII：137/131-132頁）

まだ話さない子どもが《infans》なのだとしたら、言葉を得た子どもは、《iam fari》である。ここで語源となっているラテン語の動詞《for》（話す）は、《ºbhā-》と同じように、神由来の、神秘的な力としての「話す」を指す。言葉を生み出しているのは、その人（子ども）なのではなく、何か別もの、人間の叡智を超えた何かであり、その力の現れこそが《for》や《ºbhā-》が指し示す「話す」だと言われている。

この力の現れ、何かが言葉になるという現象は、例えば《fabula》などの派生語の意味作用にも残っている。

> 同様に、「会話」や「舞台演技」などといった実に多様な意味をもつ*fabula*は、「音楽にする」と同じ意味で「言葉にする」を示す。*fabula*は、伝説や縁起、何かしら語られたものに用いられる。つまり、人間の言葉に置き換

なお、邦訳については現存するものを参考にさせて頂いたが、訳語や表現は本論考中の用語に合わせるため一部変えている。

えられた行為に他ならないのだ。物語であろうと寓話、芝居であろうと、われわれは言葉への置換技術そのものしか考えない。ここから、*fabula*は言葉だけ、現実に基づかないものだけを意味すると説明される。同じ語根から生まれた他の派生語も同様に理解されなければならない。たとえば、*facundus*は「言葉の才能がある」ということで、話の内容とは無縁とみなされる言葉による表出、雄弁ではないが自由に使いこなせる言葉を豊富にもっている、ということを意味する。（VOCII : 137/132頁）

言葉への置き換えが、「現実に基づかない」、すなわち虚構と関係づけられていることにも留意が必要である。話すことそのものは、虚構化と結びつく、と言われている。ここに言葉による「語り」がもつ本質的な虚構性、「騙り」の側面を見ることができよう[5]。

この非人称の語りは、宗教的で神秘的な由来だけでなく、「噂」や「風評」、また集団的な発話行為をも意味する。

φημί, φῆμις, φάτις, fama は、誰か分かっている主体によって発せられたのではない言葉を指している。個人的で意志的な行為に結びつけられる言葉では全くなく、ある意味、それを発するものから切り離され、それ自体のものとして提示された言葉なのである。それは全般的、普遍的な物言い、まさに個人的でない言葉であり、それを表現する人に因るのではなく、その存在自体に力があるものである――つまり、その力を作るのは、それが発話され、表に出たということなのである。それは表現というより発話行為である。これは、他様に定義できない一主体の発現である。発話を為す者が定義されず、そうされ得ないということで、ある言葉が重みを帯び、敬意を勝ち取るのはこうしたことからである。そのようなわけで、ホメロスにおけるδήμου φῆμις [*dèmou phèmis*]（§239, cf. π75）は、ある決断を前に登場人物を躊躇させる、世間的評判を指す。神託の表現は、これら全ての用語（fama等）に共通した意味作用のもっとも分かりやすい側面を示している。それはすなわち、特定の誰かに帰すことができない、集団的でアノニマスな言葉、命令を下す言葉、集団の思考の発露である。（fº297[145 297], P.O. B.61, Envelope 257bis）

5　バンヴェニストの言語思想における「語り」がもつ本質的な虚構性については、本稿後半のセクションでも垣間見る。

神託の場合が分かりやすいと表現されているように、神が人に託して知らせるお告げのような言葉が、《fama》とその派生語では想定されていると言えよう。神々や死者、不特定多数の集団の声が、ある人の口を借りて、あるいは人に乗りうつって、話しているのであり、ここでは人為を超えた現象、言語学的な知識では分析できない「話す」が描写されている。

草稿にあらわれる《ºbhā-》、あるいは『語彙集』で描かれる《for》という発話行為は、ソシュールが打ち立てた「話す主体」という概念を揺るがす「話す」行為である。それは人の口から発せられる「声」ではあるものの、その発言内容に責任を取る個人は存在しないからであり、声を発する人を「話す主体」「話し手」と呼んでいいのかすら、分からない。それはある力の顕れとしての発話行為そのものを指しており、「誰が話しているのか?」という問いは背景化して前面には出てこないのである。あえて「誰が」を問うとすれば、それは非人称の《on》だとしか言いようのない話し手が主語であり、その話し手には、個別化できるような人の顔がない。

2．語る前に――言語構造のなかで生まれる《sujet》の傾性

「話す」という行為を取りうる《sujet》について考える際に、その《sujet》の位置を潜在的に整えている、言い換えれば、その《sujet》の座椅子そのものとなっている言語のことを忘れてはならないであろう。ここで取り上げたいのは、「言語が、話す」――「話す」の主語が「言語」である――かのような直接的な表現につながる現象ではない[6]。「話す」という行為のまえに、言語のうちに主辞の態勢を整えて「話すという行為に導く」、そのような装置があるということであり、またバンヴェニストは長らくその言語的装置の研究をしていたのだと示してみせることが、ここでの賭け金となる。

実際、この問題圏につながる論考は多数見つかる。冒頭でも挙げたバンヴェニストの代表的論考「ことばにおける主体性について」（1958）は、「わたし」や「今」「ここ」といったシフターを中心に扱うが、その考察に入る

6　これについては後述。

手前で、バンヴェニストは以下のように問い、自ら答えている。

> 主体性（subjectivité）に根拠を与えることばの資格は、どこにあるか？［……］実はことばは、そのあらゆる部分においてそれを保証している。ことばは、主体性の表現があまりにも深く刻印されているため、かりに構成の仕方がそのようでなかったものとすれば、はたしてなおことばとして機能し、ことばと呼ばれうるかどうか疑わしいほどである。われわれが問題にしているのは、ことばであって、単に個々の言語のことを言っているのではない。しかし個々の言語の事実も、互いに一致して、ことばに有利な証言を提供している。もっとも明らかな事実を引用するに留めよう。（PLG1 : 261/245頁）

「人称代名詞」や「現在形（時制）」といった指標は、《subjectivité》に根拠を与える言語的な仕組みの一部でしかない。その《subjectivité》の表現は、ことば、そして個々の言語のあらゆる部分に深く刻印されている、とバンヴェニストは確言するのである。

この文章が書かれるより少し前、「動詞における能動・中動」（1950）においては、次のような箇所が見当たる。

> つまり同一の要素内［ここでは動詞活用語尾のこと］に一まとめになって一つの全体を形成する三つの指向があって、これらは、三者三様に動詞過程に対して主辞を位置づけており、これらの結合によって主辞の姿勢の場（champ positionnel du sujet）とでも名づけるべきものが規定されているということになる。人称は、主辞が《我–汝》の人称関係に入るか、《非=人称》（慣用の用語法では《三人称》）であるかに従って主辞を位置づける。数は、それが単独であるか二以上であるかに従って主辞を位置づける。そして態は、主辞が動詞過程の外にあるか内にあるかに従って主辞を位置づけるわけである。（PLG1 : 174/172頁）

ここで主辞（sujet）の姿勢の場、という不思議な言い方が取られているが、この表現は、バンヴェニストがそれまで扱ってきた言語要素の存在様態をうまく言い得て妙である。この表現以外にも、言語のなかで主辞が取り得る態

度（attitude）や傾性（disposition）、あるいは主辞の圏域（sphère）や傾向（prédisposition）に関する論考は、バンヴェニストのうちに散見される。幾つか引用してみよう。

「印欧語の完了形のいくつかの発展について」（1949）[7]

すぐに分かるように、これらの動詞［完了形で現在を意味する動詞］は全ての意味的カテゴリーにでたらめに拡散しているわけではない。ここで我々が前にしているのは、感性や精神の状態を表す動詞：*mag*, *aih*, *skal*, *-mot*、事実の状態を示す非人称的動詞：daug, -nahである。これらの完了−現在形は、ある種の主辞の状態（état du sujet）を示し、ある種の情動的、心的あるいは身体的傾性（disposition affective, mentale ou physique）を叙述する。

ゲルマン語派の完了−現在形のリストのうちに、真の他動性を示し、目的語に影響を表す意味過程を表すような「操作的」意味の動詞が一つも見当たらないのは意味深いことである。これらの形は、直接的な被制辞[8]を持つにしろ持たないにしろ、すべて主辞の領域（sphère du sujet）に限定されている。*wait*, *aih*あるいは*skal*の「能動」形は、意味過程が目的語のうえに行うことを当然のように意味するのではなく、主辞の状態に対して特別の限定を与えるだけのことである。

「ラテン語における前置詞の下部論理的体系」（1949）[9]

praeが原因を表すとき、この原因は、主辞の外に客観的に措定される外的ファクターに関連づけられるのではなく、主辞に属するある感覚のなかに宿っており、より正確に言えば、この原因はその感覚の度合いに起因している。[. . .] *Prae*は客観的原因を介入させない。それは極点、過度のみを示し、それは主辞の、概してネガティブな態度（disposition, généralement negative, du sujet）を見せることになる。（PLG1 : 137-138）

---

7 E. Benveniste, « Sur le quelques développements du parfait indo-européen », *Archivum Linguisticum*, 1, fasc.1, 1949, pp.16-22.

8 被制辞（régime）：文中で動詞や前置詞などの他の語の文法的支配を受ける名詞または代名詞（ロベール仏和大辞典）。

9 E. Benveniste, « Le système sublogique des prépositions en latin », *PLG1*, 1966, pp.132-139.

言語内部において、すなわち未だ顕在化していない言語の文法構造のなかに、これから取り得る《sujet》の感情や身体的傾性を制約したりする動詞群、あるいは《sujet》の態度を表したりする前置詞がすでに存在する、と考えるのは少し奇妙に思えるかもしれない。バンヴェニストはこの他にも、印欧語の行為名詞のうちに《sujet》との関わりを示し、《sujet》の適性・性向を示す二つの仕方があることを指摘しているが、そこにおいては、行為を行う動作主（agent）と行為名詞（nom d'agent）の組み合わせが問題になっている。客観的かつ完遂された行為は、その行為を完遂し、そうすることでその行為を所有したと見なされる作者の概念と結びつき、他方、主観的で主辞の内的傾向や方向付けを表すような行為動詞は、個人性を欠いた、一般的な傾向を表す動作主名詞と結びつく、といった具合である。

この「言語のなかの《sujet》」、「言語構造が示す《sujet》の傾性」の問題圏から発するのが人称の問題であり、よく考えられているような「対話」の問題圏、つまりは「話し手」「話し相手」を考慮したディスクールの問題圏、あるいは人称代名詞（je, tu, il）からではない。

すでに上に引いたように、1950年の中動態に関する論考のなかでは、動詞過程のなかに主辞を位置づける三つの参照軸（態・人称・数）がある、と記される。バンヴェニストは1949年に「動詞における人称構造」（下線強調は小野。以下同様）を著し、翌年1950年に「動詞における能動・中動」を発表し、本来であれば「動詞における数」という論文も執筆されるはずであった（これは講義で論じられたのみで、論文の形では発表されずに終わる）。人称の問題は、1949年の論考のなかではまず動詞活用のなかに現れる人称構造の対立の問題として現れ、その抽象的な「人称」が、具体的な人の形を取る「一人称」「二人称」と、そうではない「三人称」（ここで始めて「非=人称 non-personne」という呼称が提示される）の対立として、ある意味昇華されているのである。

3.「患者」という迂回

私たちはバンヴェニストの人称論が「わたし」「あなた」「彼／彼女」「私

たち」……といった人称代名詞の考察から生まれているのではなく、印欧語の動詞活用における三つの参照軸「態・人称・数」の検討から導きだされているとした。この「人称」の問題が、結果的には「言語のなかの主体性」の問題を、言語の《外》に引き出す契機となることは確かであるものの、「わたし」や「あなた」はあらかじめ言語の外にあるものとして措定されているのではなく、動詞の活用語尾のなかに準備されている。また1949年の人称論は、言語内部の構造のなかに、いかに「主体性に関わるもの」「主体性に関わらないもの」が対立として存在しているかを示そうとするものであった。従って、この段階における《subjectivité》は、「主体」のものではないばかりか、いまだ言語のなかに用意されている《subjectivité》であり、それは現働化を待っている状態だと言えよう。

この言語のなかの主体性（subjectivité dans la langue）が、論考「代名詞の性質」（1956）や「ことばにおける主体性について（De la subjectivité dans le langage）」（1958）に現れるような語り手の主体性、すなわち人間の営みとしてのことばのなかに現れる主体性となるには、ある跳躍が必要である。本稿の冒頭に引いたように、この1958年の論考では「人が主体として自らを構成するのは、ことばにおいて、またことばによってである」と言明される。言語のなかに宿っていた主体性は、「ことばにおいて、またことばによって」そこから飛び出し、「話す」という行為の事後的な結果として「主体」を作り出すとされる。

私たちの見方では、この跳躍は一足飛びにおこなわれたのではない。1949年と1956（1958）年の間に、「話す」という行為に関してバンヴェニストの思考の深まりがあったのだと言うことができよう。それに伴って重要だと思われるのは、バンヴェニストが精神分析、とりわけラカン派のそれに近づいたということである。この接近について、1956年の「フロイトの発見におけることばの機能に関する注記」(以下「フロイト論文」と表記）をジャック・ラカンの創刊した学術誌『精神分析』第一号に発表した他には、バンヴェニストは何の証左も残していない。しかしフロイト論文を精読することで、バンヴェニストがラカンの精神分析から受けた影響を知ることができる。ここ

では《sujet》の在り方の変容に注目してみたい。

フロイト論文は複雑な入れ子構造を持ち、また述べられる内容は濃密であるが、このなかでバンヴェニストはおおまかに三つの議論を展開している。第一に、フロイトが創始した精神分析という分野を、分析医と患者の対話の作業として理解すること。第二に、フロイトが「ことばの両義性」を論ずる際に依拠したドイツの言語学者カール・アベルの古代エジプト語に関する考察を、根拠のないものとして批判すること。第三の結論部分として、日常のことばと精神分析のことばは別ものだと区別し、精神分析のあつかう無意識の現れとしてのことばは、レトリックや言い間違いの面に現れるとすること、である。

私たちの関心をひくのは、第一部の、バンヴェニストによる精神分析の作業の説明部分である。ここでバンヴェニストはラカンの「ローマ講演」から引用を行っているからである。引用箇所の前後を含めて、ここに「ローマ講演」の該当部分を抜き書きしてみよう。

> 他者に対して向けられた言葉（parole）によって、主体の歴史（son histoire）が構成されてゆき、それを主体が引き受けるということにこそ、フロイトによって精神分析という名を与えられた新しい方法の基盤がある。[……]
>
> この方法の手段とは、言葉という手段であり、それは言葉が個人の諸機能に意味を与えるということからそうなのである。その領域は、具体的なディスクールの領域であり、それは主体の超個人的現実の領野として、である。その操作は、現実界への心理の湧出を構成するものとしての、歴史という働きである。
>
> [……] これは主体の話しかけ（allocution）は、応答者を既に含み混んでいるということ、言い換えれば、話し手はそこで既に間主体性として構成されているのだということを、強調しておく良い機会なのである[10]。

このローマ講演の要の一つは、「フロイトに還れ」というラカンの呼びかけであり、具体的には精神分析における「ことば」の研究の重要性を強調する

10　Jacques Lacan, *Écrits*, Seuil, 1966, p. 257-258.

のがラカンの狙いであった。ここでラカンは、《histoire》と《sujet》それぞれの二重の意味を弄びながら、「患者＝主体」が話しかける相手（他者）を巻き込んだ形で自分の話すなわち「物語＝歴史」を打ち立て、またそれを引き受けるのだとする。

バンヴェニストはこのラカンの文章をなぞるような形で、次のように彼なりの言い換えを行っている。

> まず第一にわれわれは言葉（parole）の世界に出会うが、これは主体性（subjectivité）の世界である。フロイトの分析を通じて終始認められるのは、患者（sujet）が言葉とディスクールを用いて自分自身を、自分が観たいと欲する姿、「相手」を促して認めさせようとする姿で「演出する」ことである。患者のディスクールは、呼びかけと訴えであって、彼が必死に自己を措定するディスクールを通して相手に行う、ときとして激しい懇願であり、自分自身の目に自分の個性を目立たせるために相手に行う、しばしば虚偽の訴えなのである。話しかけという事実だけからしても、自分自身のことを話す者は、自分のなかに相手を定立し、そうすることによって自分を理解し、自分を対比し、自分がなりたいと熱望する姿に自分を作り上げ、果ては、この不完全なまたは変造された身の上話のなかに自己を物語化するものである。したがって、ここではことば（langage）が言葉（parole）として利用され、対話の条件をなすところの、切迫していてその場限りの主体性の表現に変えられてしまう。言語がディスクールの手段を提供して、患者の人格はそのディスクールのなかで自己を解放し、自己を想像し、相手に到達し、自己を相手に認めさせるようにする。（PLG1 : 77-78/85頁）

この箇所で、バンヴェニストはラカンがローマ講演で展開する議論、精神分析の作業におけることばの重要性を、完璧に理解しているように思われる。さらに、バンヴェニストはここでラカンのうちにもない、新しい表現を付け加えている。それは《s’historiser》という新造語の代名動詞である[11]。患者はここで、相手を想定し、相手の欲望を読み取りつつ自分の物語を語り、自分

11　この特殊な動詞について、詳しくは以下の拙論を参照されたい。ONO Aya, « Prépositions, verbes pronominaux et voix moyenne. Un nouveau point de vue sur la subjectivité langagière d’Émile Benveniste », *Blityri*, VII-2, 2018, pp.39-58.

を歴史化する。ここで自分のことを話すことは、《s'historiser》だと表現されている。これはすなわち、自分がたりは必然的に虚構化するのだと、もっと言えば、話すことそのものが持つ虚構性に、バンヴェニストは触れているのだと考えられる。

またフロイト論文では、《sujet》の語がふんだんに使用される。それだけではなく、この論考において、《sujet》は文を統べる主語としての“sujet”の役割を兼ねることになる。これ以降、言葉を用いる「話す主体」という意味合いでは《sujet》という語が主語（sujet）の位置にくることは決してない。その意味で、ここでの《sujet》は、特別な権限を与えられているとも言うことができる。さらに検討すべきは、《sujet》の意味である。「フロイト論文」の日本語訳において、《sujet》はすべて「患者」として訳されている。バンヴェニストが結論部分で次のように言明しているのを思い出してみよう。「したがって私たちはかなり特異な「ことば」を前にしているのだから、これを通常「ことば」と読んでいるものからは区別したほうが良い」。そして彼は、無意識のことばをレトリックや言い間違いの領域に属するものとし、通常のことばの研究からいったんは退けるのである。確かに「フロイト論文」で分析医を前に語っている《sujet》は、まずは分析医を前に語り出す「病んだ主体＝患者」と見なされており、ゆえに「一般的な話し手」は想定されていない。

しかしバンヴェニストが普通のことばと精神分析のことばの親近性を否定すればするほど、ふたつの「ことば」の間の親近性に私たちは気づかざるを得ない。「主体」「患者」の近似性についてもしかりである。そもそも、バンヴェニストが参照しているラカンは、おそらく一度も「患者」という一つの意味で《sujet》を用いたことはない。彼は「主体、無意識の主体、下部にあるもの」そして「あることに苦しんでいる人＝患者」という複数の意味をもてあそびながら、この語を用いているのである。

ここで一度、辞書に立ち返って《sujet》の意味を確かめてみることにしよう。文法的な主語、論理的な主辞、哲学的な主体・主観の他に、どんな小さな辞書でも「実験動物、被験者、患者」という意味を掲載しているものであ

る。しかしこのバンヴェニストの論考が精神分析に関するものである以上、もう少し大きな辞書に載っている精神分析における意味合い、《sujet (de l'inconscient)》「無意識の主体」にも注意を払っておくべきだろう。ロワイヤル仏和大辞典には、「自己によって意識される自己存在とは異なる存在としての自己」と説明が添えられている。この簡略化された説明だけからすると、「意識の主体」とは別の「無意識の主体」という意味で、《sujet (de l'inconsicent)》が精神分析の領野では用いられているということである。ラカンの「ローマ講演」は、この「無意識の主体」というものがいかに言葉の裂け目から現れるかを、フロイトの教えに寄り添いながら示すものであった。

一方で、実はこの「実験動物、被験者、患者」という意味は、言語学における「話す主体」にも通じるものである。言語学の領野においては、この《sujet》こそが観察対象となる生体であるからだ。プチ・ロベール仏仏辞典では、「話す主体」の意味と観察対象としての被験者の意味を同じ項目として扱っている。

フロイト論文で現れる《sujet》に但し書きがない以上、バンヴェニストがどのような意味を込めてこの語を用いているのかは、はっきりしない。私たちの見方では、彼はむしろこの用語の様々な意味合いを全て肯定しているかのようにも思われる。いずれにせよ、このフロイト論文での《sujet》は、「主体＝患者＝話す主体」といった、生身の人間を指しているという点で、それ以前の「主語＝主辞」といった文法のなかの《sujet》と一線を画している。

バンヴェニストが精神分析の作業を「主体性の世界」と表現しているように、フロイト論文でのsujetは、たんに心の病に苦しむ患者、精神分析を受ける人のみを指すのではなく、ことばとの関係に入ろうとしている人、すなわち話している全ての人をも差すのではないだろうか。バンヴェニストの言語思想を時間軸に沿って眺めるとき、言語のなかの《sujet》が生身の声をもつためには、まずは精神分析における《sujet》であることが必要だったと言うこともできるだろう。

４．言語が語る？

「誰が」話すという行為を担うのかという問いを前にして、バンヴェニスト言語学のなかにその答えを探していくとき、表面的には全く現れないものの幾つかの証左から浮かび上がってくる思想、それが「言語が語る」という考えである。いや、この言い方は正確とは言えないだろう。語り出すのはあくまでも人なのだが、「言語が人をもって語らせる」、そのような謎めいた思惟が、彼の言語思想には見え隠れしている。

この言語の促しという観念がバンヴェニストの言語思想に生み出されるのには、二つの因子が関わっている。一つは中動態の研究、もう一つは前述の精神分析との出会いである。まずは中動態の研究から見ていこう。

バンヴェニストは1950年に「動詞における能動と中動」を『心理学雑誌』に発表する。この論文で彼はインド=ヨーロッパ諸言語が古い時代にもっていた中動態という態に焦点を置き、「能動／中動」という対立のもとに中動態の意味合いを明らかにしようとする。「能動／受動」という対立に慣れた私たちの目には異質なものであろうが、この古代の態を対立構造のなかで捉え直すことによって、「中動」ばかりか「能動」も、異なった様相のもとに現れてくるだろうとバンヴェニストは冒頭に述べる。つまり、「能動―中動―受動」という、中動態を真ん中に挟むこれまでの理解を離れる必要があると説くのである。

私たちは別の場所でバンヴェニストの中動態概念を考察し、1950年の論文に現れる中動態の定義が、トポロジカルな用語を多用しつつ、エネルギーや動きといった要素を考慮せずには理解できないものであることを指摘した[12]。この解釈に沿って「能動／中動」の対立を眺めると、以下のようになる。すなわち、能動においても中動においても、主語はある動きの発信点となる、というのは共通している。しかし能動において過程［事行］が主語から発して主語の外にエネルギーを放出するような動きであるのに対し、中動態において特殊とみられるのは、過程［事行］は主語から発しつつ、主語を

12　小野文「バンヴェニストにおける中動態」、小野 文・粂田 文編『言語の中動態、思考の中動態』、水声社、2022年、14-57頁。

含み、主語に影響を与えていくという点である。言いかえると、もともと主語の内部にいたものが（主語がその座になっていたものが）、主語を巻き込みながら、主語に何らかの力を加えるような動きになっていく、そのようなプロセスとして捉えられる。ポジティブに見るならば、その動きは「内部に変化が生じる」「刺激を受ける」と表すことができるが、ネガティブに見るならば、「巣くわれる」「巻き込まれる」とも言える、そのような動きである。

この論考で、バンヴェニストは「とりわけ中動態的」な様相を示す一連の動詞を取り上げている。メディア・タントゥムと呼ばれるこれらの動詞は、中動態の形態しか持たないという意味で特殊なグループなのである。「生まれる」「死ぬ」「ついていく」「主となる」……サンスクリットや古典ギリシャ語から例を引きながら、リストの最後に彼が挙げるのが「話す」という動詞である。バンヴェニストにとってはどんな他の動詞よりも重要なはずの動詞、「話す」であるが、その中動態的な側面について、彼は後にも先にも全く発展させることはない。しかし示されているバンヴェニストの思考の指標の幾つかをつないで延長し、矢印として捉えるなら、その延長線の交わるところが測定できる。「話す」ことにおいて、人は話し始めながら言語という別のエネルギーに巻き込まれ、その結果、話す行為のプロセスそのものから影響を受けて変容する、ということである。

この「話す」という行為がもちうる中動態的様相に関して、先ほどのセクションで見た「言語のなかの主体性」が果たす役割は大きい。バンヴェニストは言語構造の内部に、すでに主体性の「形勢」「傾性」「姿勢」が深く刻まれていると明言していた。この言語の「かたち」「かたむき」に引き入れられるようにして、人は話すのだと言えよう。いや、そうすることによってしか、人はことばを専有化できないのである。バンヴェニストは「言語＝道具」観をきっぱり否定しているが（PLG1：243）、しかし道具から人が受ける影響について思いを馳せるなら、ここで言語を使うことによって（つまりは「話す」ことによって）、人がその形にさせられている、という言い方もできると考えられる。「話す」という行為において、人が全面的な能動性を

もつのではなく、何かに絡みとられていくという側面があることを、この「話す＝中動態」の思想は示している。

もう一つの精神分析との出会いについては、すでに前のセクションでラカンとバンヴェニストの接触を垣間見た。1950年代、ちょうどバンヴェニストが言語のなかの主体性や中動態についての研究を発表し始めたころ、ラカンもまた言語学に取り憑かれ、ソシュールの記号概念や意味作用の問題、ヤコブソンのコミュニケーション理論、ダムレット＝ピションのフランス語文法を読み込んでは自身のセミナーで語るようになっていたのだった。ラカンは1950年に『心理学雑誌』に掲載された中動態論文を読み、また近しい友人であったレヴィ＝ストロースやジョルジョ・デュメジルから、バンヴェニストの言語学の概要を教わっていたに違いない。他に記録が残っていないため、1954年以降のセミネールでラカンが語ったことから類推するしかないが、ラカンは少なくとも1回はバンヴェニストと面談し（1954年か）、バンヴェニストに「精神分析と言語学」というタイトルで講演を依頼し（1955年）、そして自らの雑誌『精神分析』の創刊号にバンヴェニストのフロイト論文を掲載している（1956年）。またこの1950年代のセミネールでは、バンヴェニストの人称論やミツバチのコミュニケーションに関する論考、そして中動態論文について参照を重ねている。

一方のバンヴェニストの方は、ラカンからどのような影響を受けたのか。バンヴェニストが必ず参照したと分かっているのは、すでに述べたラカンの「ローマ講演」である。バンヴェニストは「ローマ講演」から抜粋した引用も、自分のフロイト論文のなかで行っている。しかしながらローマ講演だけでなく、おそらくはラカンの他の論文についても、ラカンがバンヴェニストの手元に送っていた可能性がある。最も可能性が高いと思われるのは、ラカンの「精神分析における攻撃性」という1948年の論考で、当初はフランス語圏精神分析学会での発表として書かれ、後に主著『エクリ』に所収されることになるものである。その理由は、この論考は「私」と「他者」の問題、レヴィ＝ストロースの報告したボロロ族のトーテムの問題、そして一人称単数の人称と主体の問題が提起されているからである。さらに私たちの仮説を進める

なら、おそらくこのラカンの論考自体が、バンヴェニストの「動詞人称」論文の読後に書かれており、それゆえにラカンはこの論考をバンヴェニストに見せたのだろう。それを示す幾つかの痕跡が、ラカンの論考には認められる。1956年のフロイト論文以降、「間主体性intersubjectivité」「審級instance」「〜のなかで、またそれによってdans et par」「主体（=患者）sujet」という新しい表現がバンヴェニストの言語思想のなかに現れるが、それは直接、ラカンとの出会いから来ていると想定される[13]。

ラカンの研究者、新宮一成は、ローマ講演のテーマは「言語という他者」を明るみに出すことであったとする。

> 私の言語活動が心理を含むために要請される、私がどういう者であるかのあかしを、私自身は立てることができない。そこで私は、私にあかしを要請している言語そのものへと向かって、私が何であるかの問いを投げ返さなければならないことになる。すなわち、太初（アルケー）からそこに在る言語なるものから、私は、私がどういう者であるかについての意味を得なければならない。意味を作ることに関して、能動性はもはや私の中にはない。それは言語そのものの中に想定されることになる。言語は私にとって、太初（アルケー）からそこに居て、私に生存の意味を与えた者と見なされる[14]。

私が、私について言語を用いて話しているとき、語っているのはむしろ言語だ、というのがローマ講演から導き出される一つの帰結である。バンヴェニストはこの真理を、より単純化された対立図式で言い表している。

> ところで、言語は社会化された構造であって、言葉がこれを個人的かつ間主体的な目的に従わせ、こうして一つの新しい、厳密に一個人に属する意匠をこれに付け加える。言語は、すべての人に共通な体系であるが、言葉はメッセージの担い手であると同時に行為の具でもある。この意味で、言

13　1950年代のラカンとバンヴェニストの接触については、日本フランス語学会2022年春季大会のシンポジウムで短く口頭発表をおこなった。その後、幾つかのエビデンスも得られたため、より詳細に論じた別稿を立てるつもりである。

14　新宮一成『ラカンの精神分析』講談社現代新書、講談社、121頁。

葉（parole）の結構は、ことば（langage）の内部でことばを仲介として実現されるとはいえ、その度ごとに唯一のものである。したがって、患者（sujet）においてはディスクールと言語との間に二律背反があるのである。（PLG1 : 78/86頁）

ここで《sujet》は、ある意味「借り物」である言語をもってしか自分を表現できず、その狭間、ギャップのなかにいる、と言われる。

このバンヴェニストの文章のなかに、後に非常にバンヴェニスト的、と言われる前置詞表現、《dans et par》の最初のヴァリアント《à l'intérieur et à l'intermédiaire》が見られることに注意を促しておきたい。それは「ことばの内部で、ことばを仲介として」という表現である。この表現の由来については、コペンハーゲン学派との繋がりを強調することもできるが[15]、ここではラカンとの繋がりも指摘してみたい。それは先ほど述べた、ラカンの「攻撃性」の論文（1948）の中にある。

精神分析的行いとは、ことばのコミュニケーション**のなかで**、またことばのコミュニケーション**によって**、すなわち意味の弁証学的理解のなかで、発展するということができる。精神分析的行為はしたがって、一他者の意図に応じて自らそれとして出現する主体を想定している[16]。

ラカンにおいては、《dans et par》という前置詞表現が表す動きは、主体から発しつつ、他者の意図という促しに応じる形で主体を出現に至らす動きである。上記の引用箇所は、それ全体で理解した場合、バンヴェニストが1958年に主体性論文のなかで述べるテーゼ、《C'est dans et par le langage que l'homme se constitue comme sujet》「人が主体として自らを構成するのは、ことばのなかで、またそれによってである」という一文と思考の近似線を描いていて興味深い。ラカンは「ローマ講演」以降、この一他者（un autre）を「言語」そのものと考え（これが対象 a と呼ばれていくものであるが）、あらかじめ与えられた言語（母語）を通らずしては自分を表現できない話者について

15　前掲の小野 2022、「バンヴェニストにおける中動態」参照。

16　Lacan, *op.cit*., p. 102. 太字強調は引用者。

語っている。同じようにバンヴェニストが言語とディスクールの二律背反について語るときも、この「言語という他者」を通過せずには語れない話し手の困難性に言及していると思われる。他者の言語、他者としての言語で語るとき、そこには何かしら引き入れられるような現象、言語の憑依を受けるような現象、能動態でもなく受動態でもない不思議なエネルギーがはたらいているのだと言うことができる。

5．語り手が語る

「語り手locuteur」という用語は、フランス語圏言語学においてはソシュールの用いた「話す主体sujet parlant」と好対照を為しており、使用例の数だけみれば、とりわけバンヴェニスト的な表現だと言えなくもない。しかしバンヴェニストがこの語を用い始めるのは、それほど早い時期ではない。初出は1950年、「名詞文について」という統辞論的考察のなかに登場するのである[17]。

後に物語論に応用されることになる「フランス語動詞における時称の関係」（1959）にも繋がるものであるゆえ、この論考の重要性は無視できない。ここで扱われている「名詞文」とは、動詞が現れないタイプの文であり、様々な言語にも同じような文は存在するものの、バンヴェニストがここで主に取り上げるのはインド=ヨーロッパ諸語における名詞文である。この論考で「語り手」 は、以下二つの引用部分に三箇所現れるが、同じ場所には《sujet》（主辞）や《personne》（人称）の用語も現れる。

> ［……］名詞文では、平叙の要素が名詞的であるから、動詞の形のになうような時称、人称などの様相の限定は受け入れられない。この場合の平叙は、時称もなく（intemporel）人称もなく（impersonnel）法もなく（non modal）、結局、意味内容だけに還元されてしまった一辞項にかかるという、特有の性質をもつことになる。もう一つの結果は、名詞によるこの平叙は、動詞

17　ちなみにラカンはより早い時期（1948年）に前述の「精神分析における攻撃性について」の発表のなかでこの用語を使い始めている。彼はこれを精神分析医で言語学者でもあったエドゥアール・ピションから借りているとしている。

による平叙の本質をなす特質にもまたあずかれないことである。すなわち、出来事の時を、この出来事についてのディスクールの時に関連づけるという特質である。印欧語の名詞文は、（もっと広い意味での）ある性質が、その言表の主辞（sujet）に属することを平叙するものであるが、これは、時称その他の限定からも、また話し手（locuteur）との関係からも、一切離れて行われるのである。（PLG1 : 159/ 153頁）

印欧語の立場からすれば、二つの平叙［名詞的平叙とbe動詞による平叙］のうちの後者が前者の、より明確、完全な変異体というわけではなく、前者が後者の不完全な形というわけでもない。両者はいずれも可能であるが、同じ表現のために使われるのではない。名詞的平叙は、それ自身が完全なもので、ただ言表を、時称や法の一切の位置付けから切り離し、話し手の主観性（subjectivité du locuteur）のそとに据える。**esti*「存在する、である（三人称単数）」が、同じ動詞の**esmi*「（一人称単数）」、**essi*「（二人称単数）」やすべての他の時称形と同一の面上に立つ動詞平叙の方は、言表の中に動詞としての限定をすべて盛り込み、言表の位置を話し手に関連づけて定めるのである。（PLG1 : 160/155頁）

名詞的平叙と動詞的平叙、そのどちらにも、語り手は存在する。しかし動詞的平叙が言表と話し手を関連づけるのに対し、名詞的平叙は、しばしば一般的真理を語るため、話し手からは切り離される。一方で、名詞的平叙は物語の地の文には現れず、ディスクール（物語のなかの直接話法）の中にのみ表出する。ここには奇妙な捻れが生まれている。

誰が話すのか――という問いに対して得られる「語り手」という用語の登場は、先ほど見た「患者」よりも早い。しかしこの「語り手」が生まれるのは、名詞文という特殊な文に関する論考のなかで、しかも捻れた形で生まれていることに注目しておきたい。ここでの「語り手」は、他人の話を伝える人、である。ホメロスのなかで、ヘロドトスのなかで、名詞文を語る人は、その場かぎりの状況やある事実を一度きりのこととして描写するのではなく、恒久的な価値をもつ断定文を表現する。言い換えれば、この語り手は、自分について語るのではなく、主観を全く入れない引用文や諺、格言を語る人、つまりは自分と切り離された言葉を語るしかない人なのである。

６．結論にかえて――否定される《sujet》のズレ

「誰が話すのか」という問いは、「話すとは何か」という問いと切り離せない。この「誰か」は、「話すこと」で変容しうるからである。話し始めた「誰か」は、話し終わったときには別の「誰か」になっている、これがバンヴェニストの「話す」という経験が持ちうる可能性である[18]。

「話す」という経験が「ずらし」を伴っているとして、このズレをほとんど無視する形で成り立っているのが、バンヴェニストの「ことばにおける主体性」のテーズである。すでに1956年、「フロイト論文」を書いたすぐ後で、バンヴェニストは次のように高らかに宣言している。「わたしは、《わたしを含むいまのディスクールの審級を発話している人》を意味する」（PLG1 : 252/235頁）、「わたしを口に出す唯一の人物として自己を同定することによって、おのおのの話し手は、かわるがわる自らを《sujet》の位置に置くのである」（PLG1 : 254/238頁）。表面的には、「わたし」を用いながら語る話し手の自己は、この「私」に充満し、ぴったりと合わさり、充実したワタシ語りを繰り広げるのである[19]。

もっとも、この「誰が」話すのかという問題は、いったん「（話す）主体」という姿に繋がった後、もう後戻りしないわけではない。60年代に入ってからも、バンヴェニストは何度も言語の内部に宿る主体性の問題に論じている。そして、「言語のなかの《sujet》」だけではなく、その他の「わたしではないワタシ語りをするような」誰かは、ときに「語り手」、ときに「患者」という顔を借りつつ、そしてつねにバンヴェニスト言語学のうちでは「否認」されつつ、ディスクールの裂け目からひょっこりと顔を出す。

どんな人でも広場に立って、「わたしは総動員を布告する」と叫ぶことはで

18 「話す」という行為とその動詞を中動態的に捉えることによって、「話す」という行為が持ちうる「ずらし」「自己変状」の過程を露わにすることが可能である。

19 けれども彼は付け足してこうも言明する。「たとえわたしが、わたしを含む連続した二つのディスクールの審級を認知し、それらが同じ声によって発せられていたとしても、このうちの一方が、他の人に起因している報告の話、引用であったりしないという保証は全くない」（PLG1 : 253/235頁）。ここにも《sujet》の、あるいは「語り手」の輪郭の曖昧さが指摘できる。

きる。しかしそのような発言は、必要な権威が欠けているために、行為たりえないのであって、それはもはや単なる言葉にすぎず、無意味な叫喚、子どものいたずらあるいは狂気の沙汰というに堕してしまうのである。（PLG1 : 273/259頁）

オースティンの言語行為論を論じた上記の引用、「分析哲学とことば」（1963）においても、無意味な叫喚をおこなう話し手の姿が描かれているが、バンヴェニストはそうした言語行為の主を否定する。1949年の論考で、ランボーの《je est un autre》「私は一人の他者である」を「自我がその構成的同一性を喪失した、本来的意味における精神錯乱を示す典型的表現」[20]と否定していたように、である。バンヴェニスト言語学において、「わたし」と発話するものは、少なくとも表向きは「正常な自我同一性」を備えていなければならない。

しかしながら否定の中にこそ無意識が知る真理が現れるのはなかったか。思い出してみるなら、バンヴェニストはフロイト論文において、この精神分析の創始者の言を追認する形で言語学的否定を次のように述べていた。

したがって、否定もはじめは許容なのである。［……］フロイト自身、否定が表示するものを実にうまく言い表している。「表象や思考の抑圧された内容は、いずれは否定されるという条件のもとに意識の中に導入されることがある。否定は、抑圧されているものを意識する一つのやり方であり、さらに言うなれば、抑圧の取り消しであるが、しかもなお抑圧されているものの許容ではない……結果として、抑圧されているものに対する一種の知的許容が生じるわけであるが、しかも抑圧の本質は存続している。」この場合、この複合した過程においては言語的要因が決定的であり、いわば否定が否定される内容を構成し、したがって、その内容の意識への浮上と抑圧の解消を後生する、ということが認められないか？ その差異、抑圧のうちの存続するものは、もはやその内容と同一視することへの嫌悪にすぎないのであって、患者はその内容の存在そのものに対してもはやどうすることもできない。ここでもまた、彼のディスクールは否認を乱発することはで

20　PLG1 : 230/209頁。

きるが、しかし、言表されたことに対応する何かがあること、それは何かであって《無》ではないことを含意しているという、ことばの基本的特性をなくしてしまうことはできない。（PLG1 : 84-85/93頁）

否定のなかに無意識的主体が顔を現すのだとしたら、それはまさにバンヴェニスト言語学において否認される「引用文の主語」「憑依された主体」「噂をする人々」「病んだ主体」にも当てはまる。辻褄の合った「語る主体」の後ろで複数の容貌を見せるこれらの顔にも全て、バンヴェニストは存在を割り当てていると言うことができる。そう、バンヴェニストは、《personne》がそもそもは「仮面」であること、《言語》と《ディスクール》の間には、割れた鏡の断面のような、歪んだ裂け目があることを十分理解しているのである。

バンヴェニストの言語思想において「話す」行為をとる人、その人称の仮面の下にどのような顔がありうるのか、あるいはどのような面貌の変容が見られるのか、本論考はその顕れを、部分的にではあれ追う試みであった。この複数の面貌を備えた「話し手」と「話す」という行為とがどのように絡み合うのか、それが私たちの次の考察の争点となるだろう。